

**A02a 日本における 2001 年しし座流星群**

小川宏 (日本流星研究会)、内山茂男 (日本流星研究会)

2001 年 11 月、しし座流星群の大出現が期待され、多くの観測者や、普段星を見ない人までもがしし座流星群に注目した。R.McNaught 氏、D.Asher 氏や、E.Lyytinen 氏らによって、これまでの母彗星中心の予報から、ダストトレイルという概念を用いた予報が発表され、2001 年は 1866 年と 1699 年放出のダストトレイルによるピークが、東アジア・オーストラリア方面で観測されると言われていた。11 月 19 日未明、しし座流星群は、文字通り、“流星雨”をもたらした。母彗星 (55P/Temple-Tuttle) が回帰してから 3 年経っているのだが、明るい流星や流星痕が数多く観測された。日本流星研究会では、多くの観測者から観測報告をいただいた。その結果、約 2000 データ、のべ流星数は 130000 個に達した。集計結果は既に公開されているが、19 日 3:10(JST) 付近が、最大 HR2300、ZHR 4500 のピークであった。ZHR1000 以上の活発な活動は 3 時間以上も継続し、明るい流星や、曲がった流星など特異な流星も観測された。また、火球と呼ばれる明るい流星が多く観測されているが、我々が行った等級別 ZHR の時間変化によると、ダストトレイルの中心を通過する際に火球クラスの明るい流星数は変化していないことがわかった。このような明るい流星は 1866 年や 1699 年に放出されたダストとトレイルには含まれていない可能性が高い。この他、流星電波観測や TV 観測も各地で行われ、眼視観測を含めて、しし座流星群における今後の解析が期待される。